

# あるむぜお113

府中市郷土の森博物館だより

a/museo NO. 113

2015年9月20日



府中市郷土の森博物館内の復元建築物 旧河内家住宅（市指定文化財）

## 目次

- 1-2 カイコがつくった風景
  - ② カイコのためのリフォーム
- 3 展示会案内
  - 企画展 ムダ堀の謎をさぐる
- 4-5 ノート 養蚕が歴史を変えた。お祭も変えた!?
  - 6 多摩川あさかな考
    - ⑥ ドジョウの世界
  - 7 最近の発掘調査
    - 竪穴建物の地鎮と魔除けの土器
  - 8 連載 『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活
    - ② 喧嘩と検使

## カイコがつくった風景

養蚕は府中の昔を知るうえで欠かせないものです。しかし現在、府中で養蚕は行われておらず、人びとの記憶からも消えつつあります。博物館では、府中の養蚕を再発見する特別展を、平成28年2月～3月に計画しています。本コーナーでは、府中と養蚕の関わりを、カイコの生育とともに紹介します。

## ②カイコのためのリフォーム

郷土の森博物館に移築・復元された「旧河内家住宅」には、かやぶき屋根の上部中央に換気用の「煙出し」と呼ばれる設備があります。内部の壁には同じく換気用の欄間障子もあり、明治時代の養蚕農家の特徴を備えています。

# カイコがつくった風景 ②カイコのためのリフォーム

カイコは虫でありながら、野菜や穀物のように育て、自宅で卵から繭まで育てるのが普通でした。卵である「種」から孵化したカイコは、とても小さく、また色も黒っぽく、毛のように見えるため、「毛蚕」と呼ばれました。毛蚕を1令幼虫と呼びます。繭になるまでの間に、カイコは桑の葉を食べ続ける時期と、桑を食べずに眠ったようになる「休眠」の時期を繰り返します。

生育するための温度が快適（25℃程度）であれば、1令は4日桑を食べ続けて1日眠り、脱皮して2令幼虫になります。2令から3令もほぼ同じような期間桑を食べ、休眠し脱皮します。4令は休眠まで6日かかり、最後の5令になると、約10日のうちに繭になります。

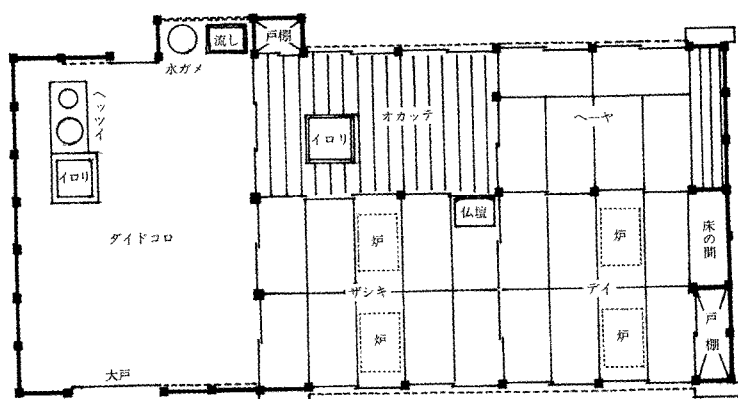
全体でおよそ1か月の行程です。府中ではこの行程を年間3～4回行っていました。

春に育てるカイコ（春蚕）の種を孵化させ、エビラと呼ばれるカイコの居場所に落とす「掃き立て」の作業を行う頃には、まだ気温が低く、カイコの生育に適していない場合があります。秋にも当然、寒い日があります。明治時代になると、養蚕技術の進歩により、温湿度管理をすることでカイコの生育効率があがることになりました。そのため室内を温めるための火鉢や炉が登場しました。養蚕を盛んに行っていた家では、母屋の天井裏を改造してカイコを飼育する空間を確保しました。そして温湿度調節のために火を焚き、暖気が上がりやすいよう、天井に隙間をあけたり、煙が必要以上に家屋内で充満しないように排出する「煙出し」と呼ばれる煙突を屋根に設置したりしていたのです。「カイコは煙が嫌い、煙が充満すると生育に悪い」と考えられてきました。そのため、カイコを生育する際になるべく煙を屋内に充満させないよう、改築がなされたのでしよう。

郷土の森博物館の敷地内には、「ハケ上の農家」として「旧河内家住宅」が移築・復元されています。この建物は、江戸時代の1844年（天保15）に入見村（現 若松町）に建てられたことが分かっていますが、養蚕を盛んに行っていた明治時代頃の間取りで復元しています。

移築・復元時における調査の結果、屋根裏から養蚕の際に使用した煙出しの痕跡が見つかりました。この煙出し部分には、明治以降に日本で用い

られるようになった、洋釘が使われており、明治以降の改造であることが確認されています。また、建物のほぼ中心にあった囲炉裏を、北寄りの「オカッテ」と呼ばれる部屋に移動させています。その結果、人の生活空間は狭く



養蚕が盛んだった頃の旧河内家間取り

なり、カイコの居場所が増えました。そのカイコのために、「ザシキ」「デイ」と呼ばれる部屋に各二か所の炉を設置し、温湿度調整ができるよう改良されました。さらに一部土壁を取り払い、換気用の欄間障子を設置するなど、煙出し設置と同時期に、人よりカイコが快適に暮らせる工夫がいくつも施されました。

煙出しをそなえ、カイコ優先にリフォームされた建物は、群馬県や長野県など、かつて養蚕が盛んだった地域に現在でも残っています。ですが府中市内では、展示のため移築・復元された旧河内家住宅を除いて、見ることはできなくなっていました。こうした事態が予測されていたからこそ、博物館では、あえて旧河内家住宅を明治時代の姿に復元しました。養蚕が行われていた府中のむかしの姿を伝えるとともに、養蚕によって作り出された象徴的な建物のリフォーム成果を景観ごと保存していくため、最善の方法だったと思います。もちろん、それは今後も残し続けていく価値のある風景だと思います。（佐藤智敬）

# ムダ堀の謎をさぐる

1996年、京王線府中駅の南方の発掘調査で、上幅14m、深さ5mにも及ぶ巨大な溝跡が姿を現しました。今日は全く失われていますが、1970年代まで、ところどころに痕跡をとどめていたという「ムダ堀」です。

伝承では、江戸時代の前期、江戸の水不足を解消するため、多摩川から取水する上水道を計画し、失敗した堀割なのだそうです。「ムダ堀」と呼ばれるゆえんです。さらに、福生から取水を企てて失敗、羽村から取水してようやく成功したのだという伝承もあります。羽村から取水された水路こそ、今に残る玉川上水です。

これらの伝承は、1974年に杉本苑子の小説『玉川兄弟』で取り上げられて、広く知られるようになりました。しかし、府中のムダ堀は、宅地化が進んで埋もれるにしたいがい、伝承も半ば忘れられてしまいました。その意味では、発掘が伝承をよみがえらせたといってもよいでしょう。

もっとも、ムダ堀の掘削をリアルタイムに語る史料はなく、伝承にシロク口の決着をつけるのは簡単ではありません。ムダ堀は多くの謎に包まれているのです。それでも発掘を機に、関係史料の発見が進みました。そこで今回の展示では、「ムダ堀」について、その研究の現状を紹介することとしました。巨大な溝はどこから、どこへ向かっているのか？ それはいつ、どんな目的で掘られたのか？ といった、基礎的な事柄について、発掘情報はもちろん、絵図や古地図そして古文書などを総動員して、考えてみたいと思います。

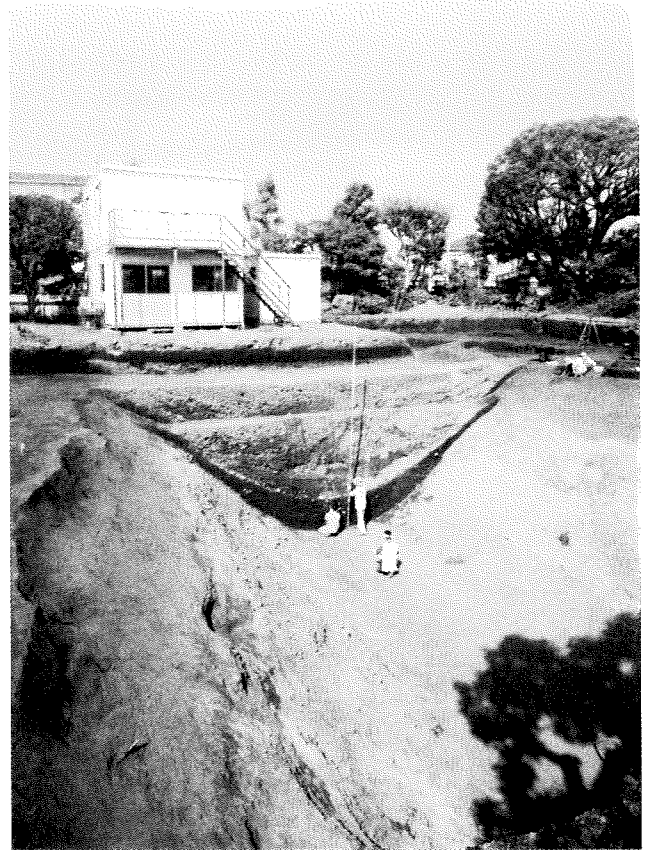
玉川上水失敗の跡かどうかが、判断できる段階にはありませんが、魅力的な伝承をまとった「ムダ堀」の謎を考えるのは、楽しい作業だと思います。その過程を展示で体験してみてください。

(深澤靖幸)

-----

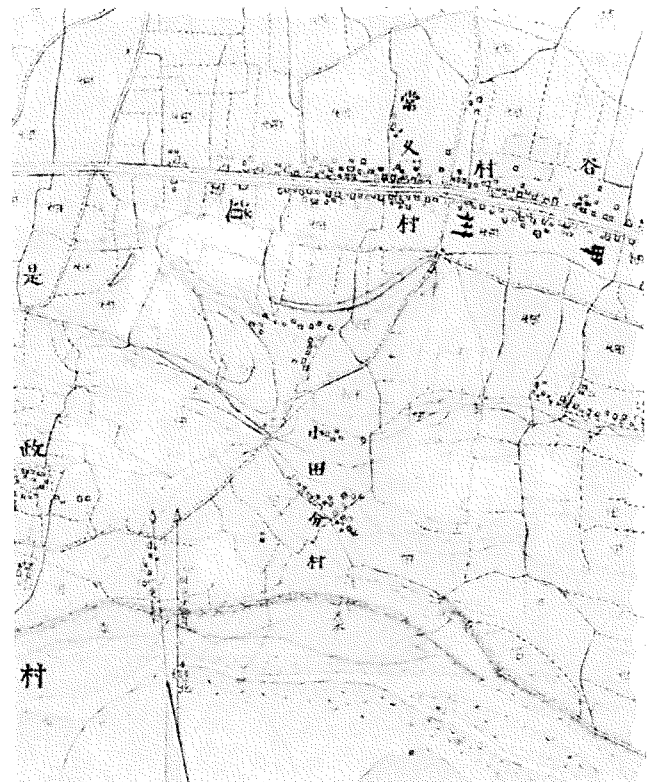
会場：本館2階 企画展示室

会期：10月10日(土)～2016年3月31日(木)



▲ 1996年に発掘されたムダ堀。この発掘を機に、関連史料の考察が進んだ。

▼ 明治前期フランス式彩色地図 中央に描かれた弧状のケバがムダ堀の痕跡。明治前期には明瞭に残っていたことがわかる。





旧河内家住宅（府中市指定文化財）

## ▼ 蚕の力

人間のためにひたすら糸を吐き、繭を作り終えると、蛾になって飛び立つことも許されずに殺されてしまう蚕…。この小さな幼虫が、歴史と文化を育み、国や社会のあり方まで変えていったこと、また、多くの人々がそのことで喘いでいたことに思いを馳せてみたいと思います。

蚕から生糸を取り出す養蚕は、奈良時代以前から行われていましたが、江戸時代にはまだ中国産の生糸・絹織物を輸入していました。そのために大量の金銀が佐渡や石見から持ち出され、これを克服するために国内の養蚕・製糸の技術向上が求められました。その成果で幕末の開国と同時に、生糸は海外へ市場を広げ、さらにフランスの技術を導入した富岡製糸場が造られたことなどにより、明治の主要輸出品目に躍り出ました。生糸は外貨を稼ぐ手段ともなり、近代化を大きく進めました。日清・日露戦争に勝ち進んだ軍国日本を支えたのは養蚕・製糸業だとの意味で、「蚕が軍艦に化けた」とも言われました。

近年世界遺産に登録されて話題になった石見銀山と富岡製糸場も、そうした養蚕を媒介とする日本の近代化という文脈のなかで捉えることができるでしょう。こちらはまだ世界遺産になる予

定はありませんが、府中市郷土の森博物館にある茅葺きの農家・旧河内家住宅は、明治後期に養蚕を目的とする数々の改築が施され、近代化を支えた一軒一軒の農家による養蚕の仕事を示す貴重な文化遺産となっています。

ただ、養蚕は農家の副業として行われ貴重な現金収入となった、という評価だけでは言い尽くせないものがあると思います。何しろ母屋は「お蚕様」の屋敷に変わり、お盆は養蚕の関係で「一日盆」（8月1日前後）にずらし、「武蔵野」の景観を蚕の餌とする桑畑に一変させてしまったほどですから。

## ▼ 『あゝ野麦峠』の世界

山本茂実のルポタージュ『あゝ野麦峠—ある製糸工女哀史』（1968年刊、後に角川文庫・朝日文庫）は、明治期に岡谷（長野県）の製糸工場で働く工女たちとその時代相を描いた不朽の名作です。この本に書かれていることは近代日本が歩んだ事実として永く伝えていかななくてはならないことだと思います。ここでは、この『あゝ野麦峠』に触発されて書かれた忘れがたい小編2編を通してこのことに触れておきます。

民俗学者・宮本常一に「女工たち—生活の記録

6) (1969年初出、後に『女の民俗誌』岩波現代文庫)があります。当初の富岡の工女が士族の娘であったことに対し、諏訪の工女は貧しい農家の娘であったことを指摘し、「一ばん弱い女たちを犠牲にして日本の明治以降の産業が伸びていった事情がよくわかるのだが、実は娘たちがそういう犠牲になってくれなければ、かぎりなく転落をつづけなければならない農家の生活があった」と述べています。

もう一つは在野の考古学者・藤森栄一の「野麦峠」(『峠と路』学生社1973年刊)です。藤森は信州岡谷でデパートの増築工事の現場に立ち会い、そこで「つい明治の頃までどこでも市販されていた婦人の髪油を入れる油壺」を拾います。そこは弥生の遺跡であるとともに、『あゝ野麦峠』にも描かれた「労働爭議ストライキの発現地、山一林組製糸工場の工女部屋の跡」でもあったのです。「製糸工女の誰かの汗のしみた形見」と思った藤森は、諏訪から塩尻峠・野麦峠をたどる旅に出ます。工女のための「お助け小屋」の跡や帰郷を目前に絶命した「政井みねの碑」などを見て、「明治四十二年、日本という資本主義国家が確立しようとしていた陰に、こんなかなしい一つの細胞があったのは、あまりに歴史的である」と述べています。

### ▼ 蚕が取り持つ「くらやみ祭」

さて、話は一転して、今も府中の街を賑わす大イベントに大國魂神社例大祭「くらやみ祭」があります。毎年5月5日夜の神輿渡御がクライマックスを飾りますが、8基の神輿とこれを先導する6張の大太鼓に、それぞれを運営する伝統的なサポーター組織＝講中が形成されていることが大きな特色です。ただ、講中がいつどのように組織されたのか不明で、幕末から明治頃が画期になっていると考えられますが、それを具体的に示す史料は全く残されていません。

そうしたなかで、当時の養蚕をめぐるネットワークが講中を作ったという伝承がいくつか語り継がれていることが注目されます。例えば近年復活した御本社太鼓の講中の一つ石川講中(横浜市青葉区)では、御本社太鼓の元締めをする番場(府中市宮西町)で繭の即座師をしていた人物が、仕事で石川村を訪れた際に太鼓の話をしたこ

とが講中成立の契機だったと伝えられています。その後この即座師宅が祭当日に講中の休憩所として提供されていたとのこと。二之宮の神輿・太鼓を運営する八幡宿(府中市八幡町)においても、即座師の家が講中の休憩所になっていたと言われています。

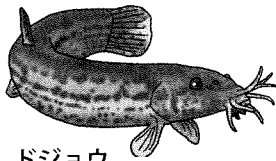
明治から昭和前期にかけて農家の副業として養蚕が盛んに行われていた頃、地域を巡回して繭を買い付ける商人は糸繭師(即座に値段を付けることから即座師とも)と呼ばれました。彼らは、これまでの純農村にはなかった広範囲のネットワークを持ち、情報伝達も得意だったはず。府中に拠点を持つ糸繭師のなかには、大國魂神社の武蔵総社としての由緒を伝え、深夜の神輿渡御のことや他で例を見ない巨大な太鼓の話を広め、参加の権利を持つ講中形成への呼びかけをした者があったかも知れません。そうだとすると養蚕に関わる商人たちが、近代の祭礼組織の改革に一役買ったことになるのです。

宮本常一は『府中市史』(1974年刊)に寄せた「町のくらしの変遷」という一文のなかで次のように述べています。「貧しい村々が養蚕によって活気を呈し農家の生活が向上して来ると、神輿講や太鼓講への寄付も、府中の世話方が予定している額よりははるかに大きく、それが神輿をりっぱにし、太鼓を大きくしていった。しかもその寄付者たちの分布を見てゆくと、その殆どが養蚕地帯であることに興を覚える。そしてこうした寄付者の仲間が祭に参加するのだから、祭が異常な熱気をおびて来るのもまた当然であった」。蚕の力、恐るべし…。



くらやみ祭の御本社太鼓と太鼓講中(2012年)

## ⑥ ドジョウの世界



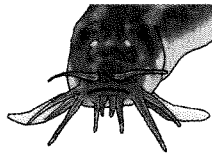
ドジョウ



シマドジョウ

今回は多摩川で見られるドジョウの話です。本来ドジョウは、河川よりは、田んぼや周囲の用水路、あるいはため池などに多く生息する魚です。もちろん河川にも活動の場はありますが、泥底を好み、泥によく潜るため、砂利や石底の川ではあまり見ることができません。ドジョウは「泥鰌」と書きますが、「泥生」から付いた呼び名とも言われています。まさに泥を好む生態を表した名前です。潜りやすい筒状の細長い体をしているとは言え、魚なのに水中より泥の中が棲みやすいとはどうしたことなのでしょう？

ドジョウの全長は成魚で10～15cm、体色は茶褐色で、地域によって濃い色や薄い色があります。トレードマークのヒゲは5対10本で、これはドジョウ科に属する他種ドジョウと見分ける際のポイントになります。一般的に扁平な形の魚とは異なり、泥に潜りやすい姿をしているのは、他の魚との棲み分けで、泥底に生活の場



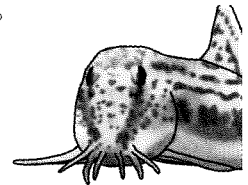
ドジョウのヒゲ

を求めたことが理由と思われる。そのためドジョウは、腸でも空気呼吸が可能な妙技の持ち主で、水中の酸素欠乏には大変強いのです。腸の末端に毛細血管が網目状に発達し、取り込んだ空気を蓄えてガス交換を行う機能を備えているからです。酸素が不足になりがちな泥底で暮らすには、こうした進化が必要だったのでしょう。もうひとつの特徴は、何と言ってもあのニユルニユル感です。体の表面は円形の微少な鱗で覆われていますが、さらにその上を覆う表皮から出る多くの粘液がその正体です。搦もうとしても指の間からスルッと逃げてしまうのは、ウナギやナマズのように身を守るための手段なのです。大きくてしっかりした鱗を持つ魚では、鱗そのものが体を守りますが、何せドジョウの鱗は小さくて頼りないの

で、粘液量を多くすることで、それをカヴァーしていると言うわけです。

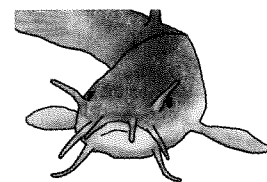
柳川鍋などで食用としても人気を呼び、かつては童謡にも登場したドジョウですが、近年は少なくなっています。常に身近な生きものとして、田んぼの用水路などで群れていたものの、棲みやすい里山環境の減少には対抗しきれなかったようです。石底の多い多摩川でも、やはり以前に比べるとかなり減っています。面白いものでこうなると、石底を好む別種のドジョウが増えて来ます。それは河口域から上って来るシマドジョウで、銀色の体に黒い斑点が縞のように見える種類です。ドジョウの10本に対してヒゲは3対6本、最近では多摩川で普通に見られますが、同じドジョウでも増水で砂礫の上に泥が溜まったりすると活動に影響が出てしまいます。

また、多摩川では成魚で8cm程の個体がほとんどですが、西に分布するシマドジョウは12cmくらいが通常で、もしかすると東西のシマドジョウで種が異なるのではという見方も最近では生まれています。



シマドジョウのヒゲ

ドジョウやシマドジョウと一緒にいることが多いもう1種は、ホトケドジョウです。ヒゲの数は4対8本で、1対は口元にあるのが特徴です。水が冷たく水質の良い伏流水の出る、流れの緩やかな場所に棲んでいます。上から見るとハゼ



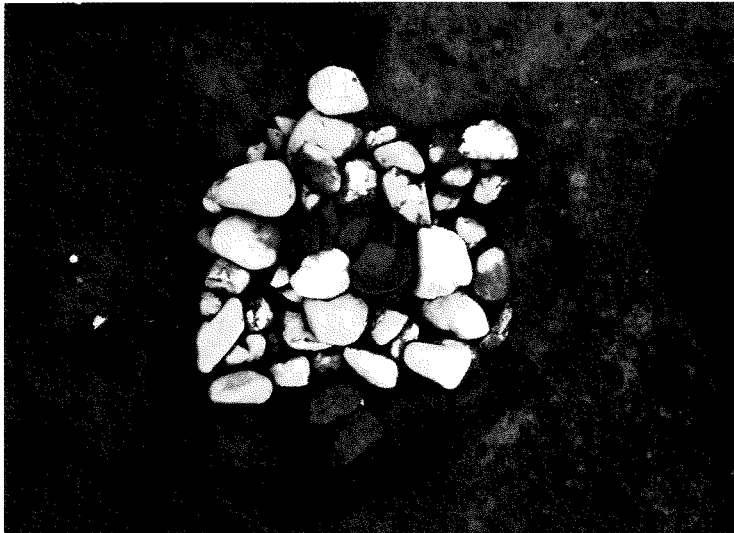
ホトケドジョウのヒゲ

にも似た寸詰まりの太った体型で、近い将来絶滅が危惧される希少種にもなっています。現在の多摩川は整備が繰り返され、何とか在来のドジョウも泳ぎますが、

ドジョウよりもシマドジョウが増えたりする変化は認めないようです。近年は、中国や朝鮮半島から食用ドジョウの輸入に混じって日本に入った外来種が各地で繁殖し、また在来のドジョウとの交雑も起きています。他の魚同様に、ドジョウの世界も少々混乱気味と言ったところでしょうか。

# 竪穴建物の地鎮と魔除けの土器

寿町二丁目 府中市ふるさと文化財課 野田 憲一郎



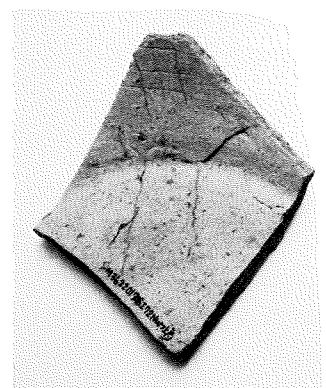
竪穴建物の床下から見つかった地鎮跡

本誌 50・57・111 号で紹介した、武蔵国衙西北（戌亥）の社跡（寿町2丁目）の西側調査地区で、また新たな発見がありました。竪穴建物跡から、祭祀にかかわる遺構と遺物が見つかったのです。

今回発見された竪穴建物跡は、一辺が約6mに及ぶ大型の建物で、西壁に設置されたカマドは、瓦などを補強材にした修理の痕跡も見られるなど長期間にわたり居住していた様子うかがえます。竪穴建物の床は、土をたたき締めた土間状の床を造りますが、この床下から直径約70cmの浅い穴に拳大の石を詰め、須恵器の坏を中央に置いた遺構が見つかりました。この遺構は、竪穴建物の構築途中に掘られており、床の下に埋められていた状況から、建物の地鎮をおこなった跡と考えられます。このような、竪穴建物に集石を伴う地鎮跡は、武蔵国府の調査ではこれまでに例がなく、大変特殊な遺構といえます。

また、この竪穴建物跡から出土した遺物のなかに、「井」の字のような格子状の記号が刻まれた須恵器坏の破片が2点出土しました。これは道教の災いを遠ざける呪術に用いられる記号で、日本では九字（ドーマン）といいます。つまり、魔除けの記号を土器に刻み、呪符として使用したものと考えられます。2点の坏はどちらも、竪穴建物が廃絶した後に棄てられた可能性が高いので、竪穴建物跡とは若干の年代差がありますが、時代的にはどちらも平安時代前期のものであるため、この頃この場所には、呪術に精通し祭祀を行うような人物が存在していたと見ていいでしょう。

武蔵国衙西北（戌亥）の社跡の西側では、社に関連した「神」「戌」の墨書土器や特殊な遺構が集中して出土しています。社跡に関連した遺構・遺物は、全て平安時代前期のものであることから、今回の竪穴建物跡や魔除けの坏は、時期的に合致するものといえます。その関係性から想像すると、この竪穴建物とその近辺は、社の祭祀に関わりを持つようなシャーマンが居住していた場所だったのかもしれませんが。



九字が線刻された須恵器

# 連載 『県居井蛙録』にみる江戸時代の庶民の生活

## ②喧嘩と検使

『県居井蛙録』は、住吉町の旧家・内藤治右衛門家に残されていた、享和2年(1802)から天保7年(1837)にいたる日々の記録です。4代当主重喬と5代当主重英によって著されたこの史料には、当時の庶民の生活に関わるさまざまな出来事が記されています。本コーナーでは、毎回テーマを決めてその内容を紹介したいと思います。

私たちが集団で生活する以上、さまざまな原因で他者と衝突するのは、仕方のないことです。その際、口論で済めばよいのですが、時に暴力を伴う大喧嘩に発展することがあります。今回は、『県居井蛙録』から、そんな喧嘩にまつわる事件を紹介したいと思います。

まずは、治右衛門の下男三平の一件です。文化3年(1806)4月、府中宿での用事を済ませた三平は、帰路に本町分梅(現分梅町)の酒屋に立ち寄りしました。お酒を楽しむはずが、酔った勢いもあったのか、三平は地元の4人と喧嘩となり、殴られて道に倒れてしまったのです。事情を聞いた治右衛門は、まず本町の村役人に話をしましたが埒が明かなかため、代官所に検使の派遣を依頼しました。検使とは、現地に赴き見分を行う役人のことです。その取調べ中、府中宿などの6人の仲裁により、治右衛門が詫証文を受け取って示談となりましたが、『県居井蛙録』には「大騒動」と記されています。

文政13年(1830)7月、中河原村(現住吉町)の藤四郎が、一ノ宮村(現多摩市)の渡船場での喧嘩で殴られた際には、さらに大きな騒動となりました。中河原村より検使を願い、一ノ宮村が3人の支配者がいる相給地だったことから、4人の検使立会のもと取調べが行われました。途中、近隣の村々から14人が仲裁に入りましたが、一ノ宮村が示談に応じず、江戸の勘定奉行所で取調べを受けることになりました。擦った揉んだの末、9月末に双方が謝り示談が成立しました。この喧嘩は、酒に酔った藤

四郎が言いかりをつけたことから始まったため、暴力をふるった側にも言い分があったようで、なかなか解決しなかったのです。

ところで、このような喧嘩の全てに検使を依頼したわけではありません。文政11年(1828)8月1日、六所宮(現大國魂神社)の祭礼で、本宿村(現西府町)の鉄五郎が是政村(現是政)の2人と喧嘩をして負傷しました。仲裁のもと一旦示談が成立しましたが、その後鉄五郎は傷から破傷風になり、死亡してしまっただけです。このことから、本宿村は検使を依頼するため江戸に向かいましたが、その途中の府中宿で仲裁人に止められました。協議の結果、金25両を受け取って示談となり、検使は見送られました。またこの翌年には、本宿村の人が喧嘩相手の腕を折り、示談金10両を支払って解決しています。つまり、事件の大小に拘わらず、双方が納得すれば検使は必要なかったのです。

検使が来れば、宿泊代など種々の経費がかかりますし、取調べが江戸で行われれば、滞在費などの出費が嵩みます。このため、検使を入れずに地域の人々の力で解決できれば、それにこしたことはありません。しかし、相手側との交渉がスムーズに運ばなかったり、双方が納得せず示談に至らなかったりした場合に、検使を依頼しました。これは、公的権力を介在させて示談に導くもので、経緯を明らかにして、後に私的な禍根を残さないようにする効果もあったと考えられます。(花木知子)

休日下男三平因解本宿宿分梅平左門酒屋を  
分梅者口喧嘩流致由往置也例居流平左  
三平此知和由左所豊吉八町至清右下男安登  
相手由中検使致工 福田又市南出役相手  
手籤度引取九日大雨示難才又十日十日  
坂人入府中平蔵是政長右門中平佐右門  
内保成十二部出役平八坂人大勢佐花文  
大騒動入

下男三平の喧嘩